
高校生の時間外廊道（じかんがいろうどう）

よみよみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校生の時間外廊道

【Zコード】

Z4985Z

【作者名】

よみよみ

【あらすじ】

普通の高校生、愛田千秋に届いた一通のメール。それが全ての始まりだった。メールは、名無しで内容は、『踏ませるな、助ける』全く訳が分からぬ、メールだったが。千秋は、そのメールの重要度を次の日? になつてから気づくのであった。

第1話 一通のメール（前書き）

この作品はフィクションです。実際の人物・団体・事件などには一切関係ありません。

第1話 一通のメール

4月6日のこと……

俺の睡眠を邪魔したのは、いつもの日覚まし時計のうるさいアラームでは無く、一つメールの着信だった。

ブーン、ブーン、ブーンブーン！

俺の枕元で、これでもかと自己主張をする。人類の英知の結晶。「あーうるさいな～誰だよ～こんな朝っぱらから、メールなどしてくる奴は」

部屋のカーテンの隙間からは、暖かそうな日の光が指しこんでいる。残念ながら、もう朝みたいだ。

携帯を開けて液晶画面に目をやると、6時58分をデジタルがとても分かりやすく教えてくれた。いつも起きるのは7時ジャスト。どうやら、もう2度寝をしている暇は、無いみたいだ。俺は一つのため息を漏らす。

携帯の画面には、新着メール1件。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日田ナシション。『踏ませるな、助けろ』

はつきり言おう。訳が分からぬ。俺の睡眠時間2分を返せ

ジリジリジリジリ！

「うるせー！」

バン！

「あー今日は、ついて無い1日になりそうだ

眠たい眼を右手の指で擦りながらをは、またため息混じりに呟いた。

朝の登校。俺は、通い慣れない道を自転車で走っている。確かにまだ新鮮さがある道だ。昨日が入学式だから、当然の事だらう。中学の時の通学に比べて、風を切る感覚が気持ち居思うのは、新生活のスタートと言つ出来事が加担しているのかもしない。

だが、俺は余り新生活に期待はしないように心がけている。本来なら、もっと新生活らしく、ウキウキとしていたほうが良いのかもしれないが、変に期待すると、あとでの理想のギャップに耐えられない可能性もある。実際、中学の時もそんな事があつたし、妙な期待は、しない方がいいだろう。俺は、同じ轍を一度も踏みたくはない。とはいへ、俺だつて、全く期待していなるのは嘘になる。そりや高校生だし、彼女の一人でも作りたいなんて思つてるのは此処だけ話だ。つまり俺は、何処にでもいる普通の高校生で在り、高校生らしい普通の日常をエンジョイする、そんなつもりだが、少し気になるのが朝のメールだ。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

何だ、この訳のわからない、文章は？ 新手のローンメールだろうか？ それとも俺の悪友か誰かの悪戯だらうか？ 俺は頭の中で自分の身の回りに居る容疑者の顔を思い浮かべた。だとすると、一番怪しいのは

俺が学校に着き、自転車小屋へ我が愛車。まだ新車の1980円。命名『壱キュッパ』を駐車していると、校門の方から、馬鹿のように、いや間違つた、馬鹿な容疑者第1号が大手を振つてこちらへ向かつて自転車を漕いで来る。

「よつおおー！ 愛ちゃん

殴りたくなる笑顔で自転車を漕いでこちらへ向かつて来る悪友に、

どうやら俺もそれなりの誠意を見せなきゃいけないか。
タタタッタ！ タタタッタ！

俺は、馬鹿に向かって、走つて行き、右腕で朝の挨拶のラリアットを食らわしてやつた。

「グットモーニング！」

「じふー！」

自転車から倒れ込み、その場に転倒する馬鹿。

「痛ててて」

俺は、ソイツを見降ろしながら、

「おい、そのあだ名で呼ぶなと、何度言つたら分かる？」 佐伯利^{さえき とし}
一 僕の名前は、愛田^{あいだ}千秋^{ちあき}だと、あと何回言え、その頭で理解出
来る？ 中学三年間でお前は、何を学んできた？」

親指を立て利一は、

「お前の好きなのもからスリーサイズまで覚えて来たぜ」

「……楽に逝けると思うなよ」

俺がコイツにいつものノリで殴る^うとした時、俺達の田の前に、制服を着て分厚い黒い本を持っていて、微笑んでいる、長髪の女子生徒が

かつ、かわい

「通行の邪魔よ、消え失せなさい、ゴミクズ共」

「…………」

時が止まつた気がした。

俺達に女子とは思えない言葉を吐き捨てるに昇降口へと消えて行つた。

「通行の邪魔よ、消え失せなさい、『ミクズ共

「…………」

時が止まつたきがした。あんな言葉を女子に吐かれたのは、生まれて初めての体験だつたと思う。

そう俺達に言い放つと、その女子は、昇降口へと消えて行つた。

「…………おい、千秋」

その女子が立ち去つた後、利一は俺に驚いた顔をして俺に言つた。

「何だ、馬鹿」

「高校つて怖いな」

確かに、怖かつたが、そんな事よりも、俺は、

「そうだな、だか俺は、お前のほうが、ある意味怖いよ」

「それって、どう意味だ？」

「コイツと話しているのは、疲れるから、俺は利一を置いて、早足で昇降口へと向かう。

「おい、待つてよ」

急いで、自転車を置いて、俺の後を付けて来る、利一。

「それにしても、奇跡だな、また千秋と、一緒に学校になれるなんて、やっぱ、神様は、居るな」

何をしらじらしい。お前が俺の受けた高校を調べて、同じどこを受けたんだろうが！ 滑り止めまで、同じどこ受けやがつて。こんな奴が、俺よりも、数倍頭が良いと思うと、人間は、つべづべ平等でないと感じてしまう。

「おい、利一」

「ん？」

「明日、学校来ても、お前の上履き無いからな」

「俺は、コイツは、虚め宣言をした筈だが、

「何だよ、俺の上履きが欲しいなら、今やるよ」

下駄箱から、上履きを取り、俺に渡す、利一。コイツは、どんだけポジティブなんだ？ このポジティブを日本全国民が持つていれば、自殺なんてモノは、この国に無くなるかもしれないな。

「おお、そうか」

俺は、まだ白く汚れない、上履きを受け取り、

「利一、今何時だ？」

利一は、何も見ず、素早く、

「今、8時26分36秒を回ったところだけど

時刻を答える。何も見ずに。

「あと、3分弱かホールームが始まるのは

「おらああ！」

「ブン！」

昇降口の外へと、上履きを投げ捨てた。上履きは、華麗な弧を描き、学校の柵を越えて行った。

そのあと俺は、自分の教室を田指し、前を向き歩きながら、我が、悪友を背中を見せながら右手を頭上へと持つて行き。手を振る。

「じゃあな、高校始まって、そういう、遅刻するなよ親友」

何か後ろで、ぎゃーぎゃー言つていたが、俺はそれをスルーし。何事もなかつたように、スタスターと歩く。背後から駆けだす、足音が聞こえて、小さくなつていったのは、利一のものだろう。

そして、俺が自分の教室。1-3に入ると、いかにも、始まつた感じのういういしさ溢れる光景が広がつていて。話している者、席に座つて静かにしている者、音楽を聞いている者、本を読んでい

る者、様々だ。まだ、慣れていと、いうか、居心地の変な空間。中1の時や、クラス別けをした時を思い出すな。

げっ！

俺が、なんとなく、クラスを見渡していると、さつき、俺と利一に毒舌を吐いた、女子生徒が、静かに、本を読んでいる。普通にしていれば、可愛いんだがな……アイツには、関わらないようにしどこう。

それから、数分後。教室に担任の男生教諭が入って来て、軽く挨拶をし、

「それじゃあ、まず、出席を取ります、まず、安久津」

その時、点呼の声をかき消すかのように、教室の前のドアが開いた。

ガラー！

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ、いきなり、遅刻してスイマセン！！」ドアを開けるな、いなや、大きくお辞儀をする息を切らした男子生徒が。見覚えのある頭、聞き覚えのある声。

何故お前がここに来る利一？ お前の教室は、隣の4組だろうが！ 頭を上げた、馬鹿と、俺は目が在ってしまった。

「アリヤ？ なんで、千秋が此処に？」

他人のフリ、他人のフリ、他人のフリ。

「君、何処のクラスだい？ こここのクラスは、全員そろつているんだが？」

担任が、馬鹿に問う。確かに、座席には、もう空席は無い。つまりこの空間にお前の居場所は無い。速やかに在るべきところへ帰れ。

「え？ 此処は、4組じゃ……」

一歩さがり、ドアの上にあるクラスプレートを見る利一。

「あっ、失礼しました——！」

そう言って、ドアを閉めて、左の4組の方向へ消えていく利一のシルエットが、教室のドアの上にある長方形の曇りガラスに写った。

そして1 3我がクラス内は、笑いに包まれた。
はあ～アイツと、友達だと、知られたくない。無理だと思うが。

第3話 絶滅危惧種

そして、学校が普通に始まって一日田といつ事もあり、これと書いて授業らしい授業もせず。あつといつ間に、4時間が過ぎて、昼食の時間がやつて來た。

今日は、母親に作つて貰つた弁当だ、学校の売店といつのを使ってみたかったが、どういうモノか分からないので、今日のところは無難に弁当を持つてきた。

教室を見渡すと、早くも数人のグループを作つて、机をくつ付け、食べようとしている者達も居るが、大多数の人は、自分の座席で、一人飯。1日田じゃあ、まあ、こんなものだろ。

俺が弁当を鞄から取り出した時、教室のドアが開らき、朝のリプレイのように、また、利一がやつて來た。

「ちあきーー！ 一緒に弁当食おうぜーーー！」

少しざわついていた、教室が一瞬で静まりかえつた。まだまだ他人行儀が横行している教室でコイツの行動、言動は場違いだからだ。

嫌な間だ、仕方ない。俺は右の手のひらを額にやり、はあーと大きなため息をつくと弁当を持って席を立ち、利一の居るドアへ歩いて行き、静かにドアを閉め廊下に出た。

「千秋、一緒に飯食おー」

俺は、笑顔の利一の頭を掴んで、教室の壁へと、側頭部を叩きつけた。

ドガ！

「あああ、脳細胞が死んだあーーー」

あすかわらざリアクションの大きい奴だ。

「良かつたじやないか、俺は、お前を殺すつもりだったのに、脳細胞だけで済んで、一生分の奇跡を使い果たしたな、利一」

「仏壇には、千秋と、ツーショットの写真を」

「ドガ！」

「何か言つたか？」

利一は、流石に2発目が堪えたのか、かすれるような声で
「いいえ、すいません」

「で、飯は、何処で食つんだ？」

「千秋、俺と一緒に飯を食つてくれるのか？」

「勘違い、するなよ、この状況で、教室に戻りたくないだけだ」
変な空気になってしまった、教室にわざわざ戻りたくは無い。もう
コイツと俺の交友関係はきっとクラスの連中に残念ながら知られ
てしまつている事だらう。

俺がそんな事を嘆いていると。

「「」の、ツンデレめー」

と、言いながら、俺の頬に人差し指を当てやがった。

怒。怒。怒。負の感情がヒートアップ。

ドガ！ バキ！ ドン！ バシ！ グギ！

「ぐきやあああああ」

残酷過ぎて、描写出来ません。擬音語と、利一の悲鳴だけで、
イメージして下さい。

「行くぞ」

鼻から、赤い体液を流しながら、利一は、
「はい」

と、弱々しい声を出した。まあ、問題無い。そして俺と利一は、
取りあえず廊下を歩く。

「ち、ちいあき」

わざとだらうが、女々しい声で俺の名を呼び、

「最近俺に対するツツコミが激しそうやないか？」

「何言つているんだ、利一はドムだから喜んでいるんだろう？」

俺は、邪氣の無い口調で利一に言った。

「いや、俺はドムじゃないからな、それともつ少し柔らかく、ツツコンでもいいだろ？」

「そんな風になつたら、俺のお前の関係は、崩壊するがそれで良いなら良いけど。大体お前は、どうしてそんなに俺に構うんだ？ 構うにしても他の構い方が在るだろ？」

「ツツの俺に対する言動はとにかく気持ち悪い。

「だつてさ 千秋優しいじゃん」

「はあ！？」

不意な言葉に少し動搖した。

「俺のどつ、何処か優しいだよ」

「俺なんかに構つてくれるしさ 不意な言葉にそんな驚くし。素直じやん」

「ツツは頭が良いんだか、悪いんだかたまに分からなくなる。頭脳は良いんだが。

「もしかして、照れた？」

「照れて無い」

「ちょっと声に感情をこめて言つたが、

「顔が赤くなつてゐぞ～」

「照れて無い、言つてるだろ！」

そんな事を言つてゐるが、若干頬が熱い氣もする。もしかしたら顔が赤くなつてゐるかもしね。こんな事を面と向かつて言われるのは苦手だ。

「いやにやしながら俺の顔を見る利一。

「改めて聞くが、何処で食うんだ？」

「俺は、このまま行くと、話しの主導権を利一に取られると思い。無理に話しの流れを変えた。

「せつかく高校生になつたんだから、決まつてるじゃんか。天氣も良いし、屋上で昼飯つて、俺、やつてみたかったんだよなー」「

目を輝かせて、言う利一。

「おいおい、屋上つていつたら、不良のたまり場つてイメージしか無いんだが」

なんかんだ言いながらも、階段を上る。

「大丈夫だつて、今、平成何年だと思っているんだよ、そんな絶滅危惧種居る訳が」

そして、屋上のドアを開けると、気持の良い風が、髪をなびかせたと思ったら、目の前に在つた光景は、煙草を咥えた、不良4人が立つていた。

絶滅危惧種居た――――！

そして、屋上のドアを開けると、氣持の良い風が、髪をなびかせた

と思ったら、目の前に在った光景は、煙草を咥えた、不良4人。

絶滅危惧種居た——！！

「あん！」

俺を含み一般高校生を睨む、男。

俺達は、囁くようにようにして、

「おい、利一、あんだって、『あん』」

「『あん』って何だよ、俺の知つている『あん』って。俺の知つて
いる『あん』って、あんこの『餡』と、こないだ見た、保健のDV
で観た、女人の喘ぎ声の『あん』しか、知らねえよ」

「アレじゃねえか、外国語じゃね？ どつかの国の挨拶的な」

「あんな、怖い顔で睨む挨拶する、国が在つたら、もうその国終わ
つてるよ、北〇鮮も真っ青だよ」

そんな、話を男達に聞き取れないくらいの声で話ををしている
時、俺は、二つ間違つている事に気付いた。そこに居るのは6人だ
と。不良らしき一人が、何故か分からぬが、うつ伏せに倒れてい
て動かない。もう一人は、不良4人に囲まれている、女子生徒がい
ることにだ。

男4人が黒く分厚い本持つた、女子生徒を囲んでいた、そして、
ソイツは、朝、俺達に毒舌を吐いた女子であり、俺のクラスメイト
だ。一時間目のホームルームでの自己紹介をした時にアイツだけは、
覚えた。記憶力は、悪いほうだが、迫力のある苗字と、自分の名前
と一文字被つっていて何より、初対面で毒舌を吐かれたのだから、意
識をしなくても、頭に残つてしまつていた。

「鬼塚 千尋……」

「そう俺の口から、自然にこぼれた。

「ちょっと、貴方達、臭いんから、消えてくれないかしら」

男4人に囲まれた状況で鬼塚は、全く怯むことなく。男達に言葉を浴びせる

「あん、何だ、このアマ！」

また『あん』だ。

「ああ、そう、貴方達の、そのちっぽけな脳じや、今の言葉を理解出来なかつたのね。御免なさい、じゃあ、訂正するわ、そののフーンスから、飛んでくれないかしら？」

『おい、煽つてどうするつもりだ？』『勝ち田何かないだろ』普通なら、そう思つところだが、俺は、男達よりも、鬼塚の方が、怖く感じた。

「おい、どうする？」

利一が俺の耳元で囁く。

『どうするつて、どうにかして助けるに』

ドガ！

一瞬目鬼塚から目を離した時、何か、鈍い音がしたと思つて、鬼塚のを含めた男達の方を見ると、鬼塚の前に居た男が、のけ反るような格好で空中に居た、足が屋上の床から離れている、いや、飛んでいる？ 鬼塚の右手は、縦方向に本を向けて、大きく上げていた。そこで、ようやく俺は理解した。鬼塚がこの分厚い本で男の顎を吹つ飛ばしたのだと。

「ガツ」

ドガ

そして、男は、その場に仰向け倒れ込んだ。動かない。痛いなどの声が出るのかと思いきや、ぴくりとも動かない、どうやら、気を失つたらしい。他の3人も倒れた男を見て動かない、動揺しているのが表情から読みとれる。俺と利一も動かない。そして、次に動いたのが、鬼塚だった。

女とは、思えない身のこなしで、男達の元へ飛び込んでいき、本で蹴散らして行く。

そして、1分後その場に立っていたのは、鬼塚一人だった。圧倒的。まるで、大人と子供の喧嘩のようだつた。

第5話 就寝

そして、男4人が倒れている場を悠々歩き、出入口つまり、俺達の方向へと歩いて来る。

「全く、人がせっかく、静かに昼食を取らうとしてたのに、飛んだ邪魔が入ったわ」

俺と、利一の間を通り、鬼塚に俺は、

「おい、コレどいつもするんだよ、ちよつとやり過ぎなんじゃないのか？」

その言葉を聞き、足を止める。

「これから、教員に言つて、来るわ。まあ、最低でも、停学、悪ければ退学かもしれないわね」

自分を自嘲するかのように、少し笑う鬼塚。

「別に後悔は、しないわ。あと、やり過ぎ？ 知つた風な口を聞かないでくれないしら、そいつらは、私の夢を汚したのよ」

そう言つて、鬼塚は、階段を降りて行つた。

「ふう～おかねえ～」

緊張の糸がれたらしく、利一が言葉を漏らす。

「それより、飯は、どうすんだよ。こんな惨劇の現場で俺は食いたくねーぞ」

利一は、何も見ずに。

「昼休みは、あと、22分37秒あるけど」

「仕方ねえな、教室に戻つて食つか

「えーーー」

遠足が中止になつた、小学生みたいな顔をする利一。

「やめる、気色悪い。だまつて、教室で食つてる」

そう言って、俺達も階段を降り始める。その時、俺は、朝のメールの事を思い出した。

「そうだ、利一、このメールを送ったの、お前じゃないよな？」

俺は、携帯を取り出し、画面を開き、利一に見せた。

From 不明

Sud がんばれよ。

「日田リッシュン。『踏ませるな、助けろ』

「ん、何だコレ？ 訳分かんないな

「宛先不明なんだよ、俺はお前の悪戯じゃないかと思つていいんだか」

「俺じや無いよ、俺だつたら、千秋に送るんない、もつと可愛く『コレーションしてやるぜ』

親指を立て、自信ありげに言つ利一。マジ氣持ち悪い。どうやら、

「イツでは無いらしい。

「ああ、食欲無くなつて來た」

「えつ、何で？」

俺は、利一の胸ぐらを掴んで、
「お前のせいだよ

ドガ！

利一の額に頭突きを食らわして、一足早く、階段を降りる。

「じゃあな、黙つて、一人で飯食つてろよ、お前は、喋んなきゃ普通なんだからよ

「痛てて、分かつて無いな千秋、俺が変なのは、お前の前だけだよ

「お前今日、家に帰つても、家があると思つなよ」

「それどういう意味！？」

それから、何だかんだで、利一は、何故か俺の教室で飯を食つて、何も特に変わつた事も無く、学校も終わり家に帰つた。

時刻は、23時40分。あと20分足らずで、4月6日も終わる。俺は、眠くなり、いつもよりも少し早いが就寝することにした。春休みボケがまだ抜けて無い事もあるし、馬鹿の相手をして疲れた事もある。高校が始まつて間もないと言つて、色々な事があつたな。

俺は、ベッドの布団の中に潜り込むと、あつといつ間に、意識が無くなつた。

ブーン、ブーン、ブーンブーン！

俺の枕元で、これでもかと、自己主張をする。人類の英知の結晶。「あーうるさいな～誰だ！ こんな朝っぱらから、メールなどしてくる奴は」

部屋のカーテンの隙間からは、暖かそうな日の光が指しこんでいる。残念ながら、もう朝のようだ。

俺が寝こんだまま、布団から手を伸ばし枕元にある携帯を開けてみると、6時58分をデジタル表示がとても分かりやすく教えてくれた。いつも起きるのは7時ジャスト。どうやら、もう2度寝を

している暇は、無いみたいだ。

携帯には、新着メール1件。宛先不明。

From 不明

Sud
がんばれよ。

「田中さん、助けて!」
『踏ませるな、助け!』

「また? 誰だよホントに

ジリジリジリジリ！

バ
ン
！

俺は一つの違和感、異変を感じた。そして携帯の日ごろにちを見た時、それは確信に変わった。

の筈だろ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4985z/>

高校生の時間外廊道（じかんがいろうどう）

2011年12月17日19時47分発行